案内してくれる人が必要

ガット船を案内してもらう

船の修理場の人からいえしまの話を聞く

漁師さんから魚のさばき方を教わる

今回僕らはいえしまで「好奇心を満たす」ことができる貴重な体験ができた。石船組合の方の好意でガット船に乗せてもらえることになったのだ。その際に石船組合の方は、ロープを使った甲板へのよじ登り方の実演、石材の積み込み設備や操舵室の解説、さらには汽笛を鳴らす体験までさせてくれた。実際にその産業に従事されているプロの方の話はリアリティがあってとても面白く、本来素人が行うと危険を伴う体験も、そばで指導してくれたおかげで安心して行うことができた。だから他の産業の現場でもこのような体験ができればいえしまを訪れる楽しさがもっと深まると思った。既存の産業の稼働率が低くなる中、それらの産業に従事するプロの方々が、余った時間を島を訪れる人とのコミュニケーションの時間に使えば、「新しい観光の形」が見えてくるかもしれない。「観光」を独立した産業として新たに作るのではなく、既存の多くの産業と緩やかに繋がりあい、島の人々が自らの生活レベルで訪れる人を「もてなす」という視点に立てば、いえしまは島の外の人々が継続的に訪れ、豊かな交流が生まれる島になる可能性を秘めていると思う。

ツーリスティックな島々に

「探られる島」プロジェクト2006は、平成18年の秋に家島本島・男鹿島での2泊3日のフィールドワークと大阪での4日間の会議を合わせた計7日間のワークショップの企画である。全国から集まったメンバーは、建築・土木・都市計画・ランドスケープ・経営・語学・写真など、多様な専門分野を持つ学生や社会人。僕らはそれぞれの専門分野や興味に沿っていえしまを歩き回るとともに、今回のテーマである「産業の風景」について写真を撮った。また、専門家のアドバイスを受けながらメンバー全員で一つのコンセプトに沿って議論し、冊子にまとめた。それがこの「探られる島」プロジェクトブック02だ。プロジェクトの中では「今後のいえしま」についてもみんなで話し合った。いえしまは産業構造の転換期にあり、島の人たちは今後「観光」についても考えていくようだ。そんな中、今回僕らがいえしまを訪れて感じたことは、「今ある生活の場の風景」や、その生活を営む「島の人たちとのコミュニケーション」の中に新鮮な驚きや楽しさがあったことである。僕らはそれらの中に「ツーリスティック（観光的）」な可能性がたくさん潜在していると感じた。だからいえしまは、むやみに「観光のための新しいモノ」をつくる必要はない、と僕らは考えている。今回僕らが感じた「ツーリスティック」な感覚をこれからも大切にしていってほしいと思う。僕らが今回の2泊3日のフィールドワークの結果から議論・考察した内容はいえしまの一側面を捉えているに過ぎないのかもしれない。いえしまにはまだまだ隠された魅力があるはずだ。だからこれからも僕らは新しい仲間を連れて、たびたびいえしまを探りに訪れたいと思う。

プロジェクトの仲間たちといえしまを探りに向かった

男鹿島にも上陸し産業の風景を探った

夜を徹して「今後の家島」について話し合った